

各関係機関団体の長 } 殿
各病虫害防除員

福岡県農林業総合試験場長
(福岡県病虫害防除所)

令和8年度病虫害発生予報第3号(6月)について

このことについて、病虫害発生予報第3号を発表したので送付します。

予報第3号

果樹カメムシ類の発生状況に注意しましょう

チャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ等の果樹カメムシ類については、4月以降多発傾向が続いています。原因としては、昨年秋季の多発、暖冬、2月以降の高温傾向等の影響が考えられます。発生量の地域差は大きく、筑紫野市など福岡地域で特に多い発生がみられます。

ウメ・ビワ・モモ・ナシなど春季に結実する果樹については、例年より早く被害が発生する恐れがあるため、飛来状況を確認し、防除や袋掛け作業を徹底しましょう。

発生量はそれぞれのは場や、ほ場内の場所によっても異なります。活動が活発になる夕暮時に見回りを行って下さい。また、当所のホームページ「フェロモントラップ・予察灯の誘殺数推移」も参照し、地域の発生消長をご確認下さい。



スモモを加害するチャバネアオカメムシ

6月における主な病害虫の発生動向は、次のように予想されます。

作物名	病害虫名	現況 (発生量)	6月の発生予報 (発生量)	
		平年比	平年比	前年比
かんきつ	そうか病 ミカンハダニ	並 やや少	やや多 やや少	やや多 やや多
なし	黒星病 ハダニ類	やや少 やや少	やや少 やや少	やや多 並
かき	炭疽病 フジコナカイガラムシ ハマキムシ類	やや少 少 並	やや少 少 並	並 並 やや多
果樹共通	果樹カメムシ類	—	多※ (前年比)	
茶	炭疽病 もち病 カンザワハダニ チャノコカクモンハマキ チャノキイロアザミウマ チャトゲコナジラミ チャノミドリヒメヨコバイ	やや多 少 やや少 やや多 やや少 多 多	やや多 少 やや少 やや多 やや少 多 多	やや多 並 並 やや多 並 多 多

注1) 予報の発生量は平年(福岡県の過去10年間)及び参考として前年との比較で、「少、やや少、並、やや多、多」の5段階で示しています。

注2) 予報の根拠には、巡回調査、防除員の調査、予察灯・トラップでの誘殺状況調査等に基づく発生状況、気象予報からみた病害虫の発生条件を必要に応じて記載しています。

それぞれの条件は、少発生(－)、やや少発生(－～±)、並発生(±)、やや多発生(±～＋)、多発生(＋)として示し、＋を総合的に判断して発生量を予想しています。

* 果樹共通・果樹カメムシ類の予報は前年比としています。

病害虫防除所のホームページでは、各種病害虫の発生状況を随時更新しています。
発生状況の把握や防除の参考にご活用下さい。

○福岡県病害虫防除所のホームページへのアクセス

URL: <https://www.pref.fukuoka.lg.jp/contents/fukuoka-bouzyosyo.html>
または右QRコード①

①⇒



○X(旧Twitter)で定期情報や警報等発出のお知らせを始めました。

Xの本アカウント(福岡県農作物病害虫情報)へのアクセス

URL: https://x.com/PPDPO_Fukuoka または右QRコード②

②⇒



<予想される向こう1か月の天候(令和8年5月23日～令和8年6月20日)>

期間の前半は、天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。期間の後半は、平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。

向こう1か月の気温・降水量・日照時間(数値は予想される出現確率)

	平均気温	降水量	日照時間
九州北部地方	低10 並20 高70% 高い見込み	少20 並40 多40% 平年並か多い見込み	少40 並30 多30% 平年並の見込み

(福岡管区気象台 令和8年5月21日発表1か月予報より抜粋)

【果樹：かんきつ】

1 そうか病

(1) 予報の内容

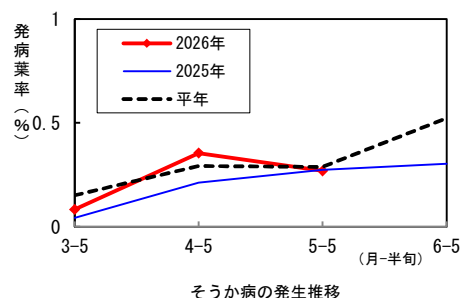
発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

- ア 5月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった（±）。
発病葉率 0.27%（平年 0.29%、前年 0.27%）
発生ほ場率 63.6%（平年 20.1%、前年 27.3%）
- イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～+）。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 伝染源となる罹病葉は園外に持ち出し、幼果期の防除を徹底する。
- イ 農薬の使用及び散布等にあたっては、最終頁の内容を確認の上、適切に実施する（以下の病害虫についても同様）。



2 ミカンハダニ

(1) 予報の内容

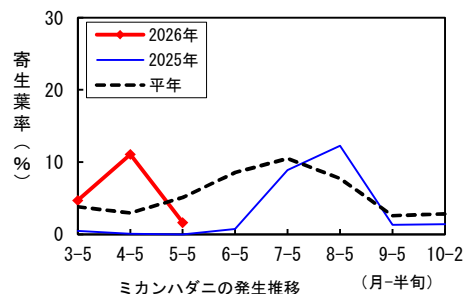
発生量：平年よりやや少なく、前年よりやや多

(2) 予報の根拠

- ア 5月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった（-～±）。
寄生葉率 1.64%（平年 5.14%、前年 0%）
発生ほ場率 36.4%（平年 39.0%、前年 0%）
- イ 向こう1か月の気象予報では、やや少発生の条件となっている（-～±）。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 薬剤防除にあたっては、薬液が葉裏に十分かかるよう丁寧に散布する。
また、薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統薬剤の連続散布を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



【果樹：なし】

1 黒星病

(1) 予報の内容

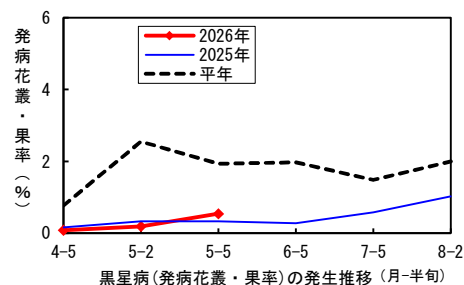
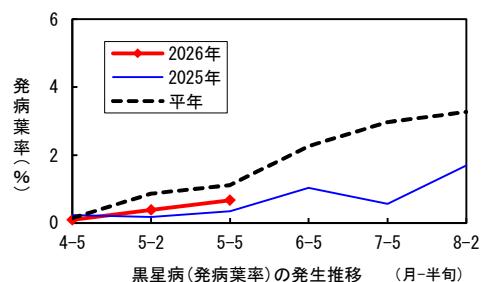
発生量：平年よりやや少なく、前年よりやや多

(2) 予報の根拠

- ア 5月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった（-～±）。
発病葉率 0.67%（平年 1.12%、前年 0.35%）
発病葉発生ほ場率 81.8%（平年 58.4%、前年 25.0%）
発病果率 0.55%（平年 1.94%、前年 0.33%）
発病果発生ほ場率 18.2%（平年 51.2%、前年 33.3%）
- イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～+）。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 伝染源となる罹病葉や罹病果は、見つけ次第園外に持ち出し処分する。
- イ 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統薬剤の連続散布を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。
- ウ 薬剤耐性菌の発生リスク低減のため、DMI 剤、QoI 剤、SDHI 剤、AP（アニリピリジン）剤、DHODH 剤



については、同一系統剤の使用回数を年間で2回以内にとどめる。

これらの薬剤を用いる場合は、保護殺菌剤と混用することで防除効果の維持が期待できる。

エ 「幸水」の果実は開花60日後以降、再び感染しやすくなるため、果実への感染防止に努める。

2 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少なく、前年並

(2) 予報の根拠

ア 5月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった（－～±）。

寄生葉率 0%（平年 0.3%、前年 0%）

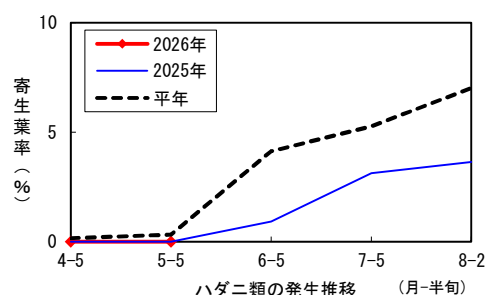
発生ほ場率 0%（平年 21.0%、前年 0%）

イ 向こう1か月の気象予報では、やや少発生の条件となっている（－～±）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 薬剤防除にあたっては、薬液が葉裏に十分かかるよう丁寧に散布する。

また、薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統薬剤の連続散布を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



【果樹：かき】

1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少なく、前年並

(2) 予報の根拠

ア 5月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった（－～±）。

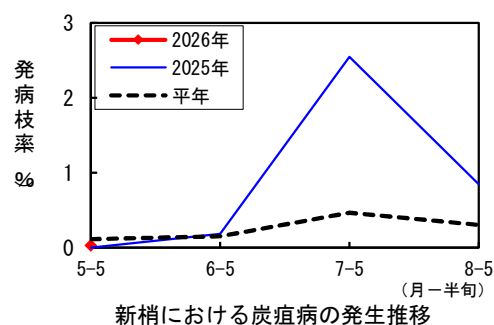
発病枝率 0.03%（平年 0.11%、前年 0%）

発生ほ場率 9.1%（平年 16.2%、前年 0%）

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～+）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 伝染源となる罹病枝や罹病果は、見つけ次第園外に持ち出し処分する。



2 フジコナカイガラムシ

(1) 予報の内容

発生量：平年より少、前年並

(2) 予報の根拠

ア 5月5半旬調査の結果、発生量は少なかった（－）。

発生枝率 0%（平年 0.5%、前年 0%）

発生ほ場率 0%（平年 26.9%、前年 0%）

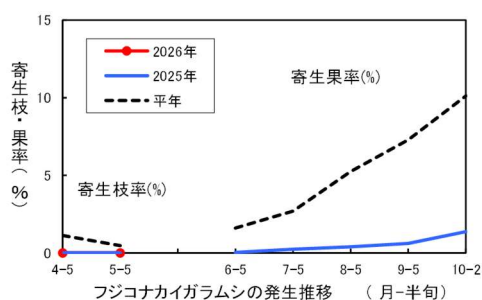
イ 向こう1か月の気象予報では、やや少発生の条件となっている（－～±）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 樹上での第1世代幼虫の孵化時期を確認し、約10日間隔で2回防除を実施する。

イ 薬剤がかかりにくい部位に寄生しているので、散布むらがないよう十分な薬量を丁寧に散布する。

ウ 天敵への影響が比較的少ない薬剤で防除する。



3 ハマキムシ類

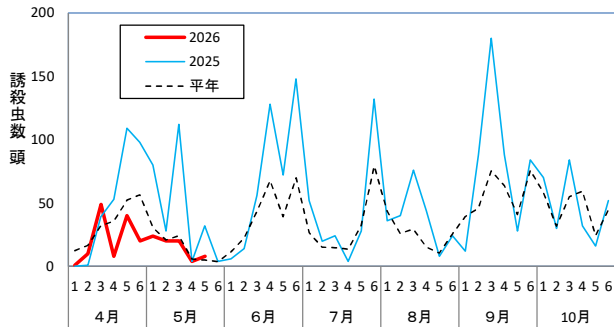
(1) 予報の内容

発生量：平年並で、前年よりやや多

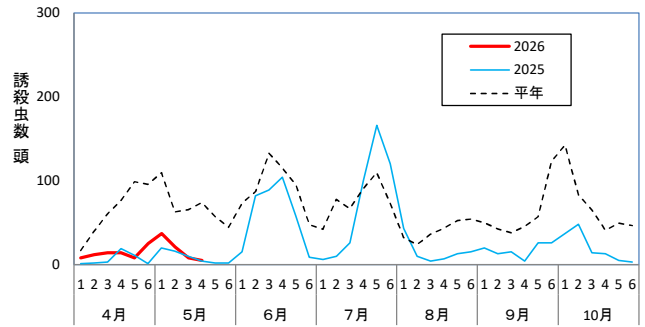
(2) 予報の根拠

ア 4月1半旬～5月4半旬までのフェロモントラップによるチャノコカクモンハマキとチャハマキの誘殺数は下記のとおり。チャハマキは八女市では平年並（±）、うきは市では平年より多い発生（+）となり地域差が大きかった。

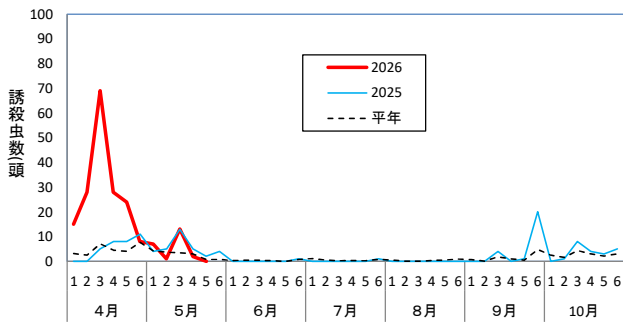
誘殺数	チャノコカクモンハマキ	<うきは市>	196頭（平年 287頭、前年 524頭）
		<八女市>	152頭（平年 700頭、前年 87頭）
誘殺数	チャハマキ	<うきは市>	195頭（平年 43頭、前年 59頭）
		<八女市>	66頭（平年 90頭、前年 1頭）



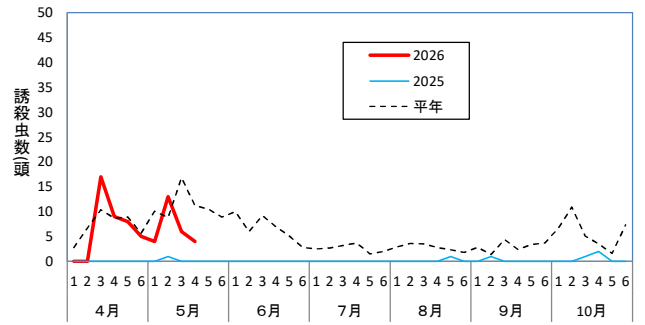
チャノコカクモンハマキ（うきは市）



チャノコカクモンハマキ（八女市）



チャハマキ（うきは市）



チャハマキ（八女市）

イ 向こう1か月の気象予報では、やや少発生の条件となっている（-～±）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア チャノコカクモンハマキとチャハマキの第1世代成虫の発蛾最盛期は、例年6月中～下旬頃である。ほ場での成虫の発生状況をよく観察し、成虫が最も多いときから7日後を目安に防除する。

イ 幼虫は葉と葉が重なった部分や、へたと果実の間に多く潜んでいるため、散布むらがないよう十分な薬量を丁寧に散布する。

【果樹共通：果樹カメムシ類（チャバネアオカメムシ・ツヤアオカメムシ）】

(1) 予報の内容

発生量：前年より多、多発年である一昨年並

(2) 予報の根拠

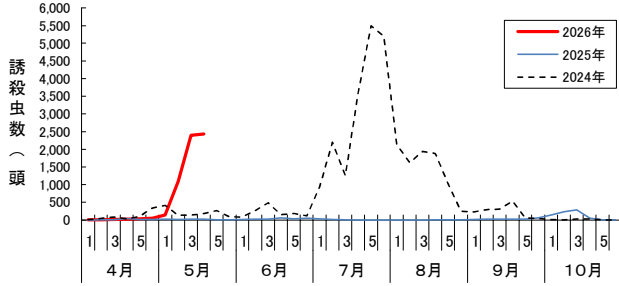
ア 4月1半旬～5月4半旬までのフェロモントラップによるチャバネアオカメムシの誘殺数は、地域差が大きいが、前年より多く、一昨年並（+）。

誘殺数	<宗像市>	176頭（2025年 1頭、2024年 253頭）
	<筑紫野市>	6190頭（2025年 154頭、2024年 1895頭）
	<うきは市>	90頭（2025年 2頭、2024年 557頭）

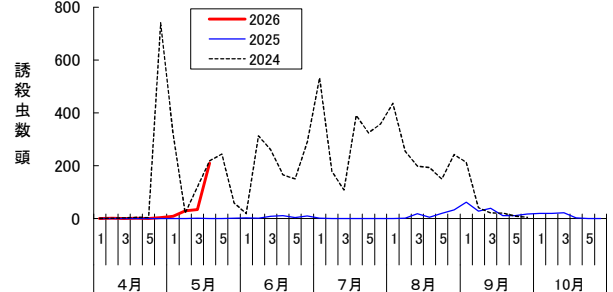
イ 4月1半旬～5月4半旬までの予察灯によるチャバネアオカメムシの誘殺数は、地域差が大き

いが、前年より多く、一昨年並（+）。

誘殺数 <久留米市> 93頭（2025年 0頭、2024年 130頭）
 <飯塚市> 9頭（2025年 0頭、2024年 41頭）
 <筑紫野市> 285頭（2025年 1頭、2024年 1433頭）
 <うきは市> 0頭（2025年 1頭、2024年 0頭）
 <朝倉市> 532頭（2025年 6頭、2024年 291頭）



チャバネアオカメムシのフェロモントラップにおける誘殺数(筑紫野市吉木)



チャバネアオカメムシの予察灯における誘殺虫数の推移 (筑紫野市吉木)

ウ 4月1半旬～5月4半旬までのフェロモントラップによるツヤアオカメムシの誘殺数は、地域差が大きい、前年・一昨年より多い（+）。

誘殺数 <宗像市> 542頭（2025年 1頭、2024年 183頭）
 <筑紫野市> 1703頭（2025年 17頭、2024年 909頭）
 <うきは市> 9頭（2025年 0頭、2024年 55頭）

エ 4月1半旬～5月4半旬までの予察灯によるツヤアオカメムシの誘殺数は、地域差が大きい、前年より多く、一昨年並（+）。

誘殺数 <久留米市> 19頭（2025年 0頭、2024年 13頭）
 <飯塚市> 125頭（2025年 0頭、2024年 22頭）
 <筑紫野市> 249頭（2025年 1頭、2024年 1971頭）
 <うきは市> 1頭（2025年 0頭、2024年 1頭）
 <朝倉市> 254頭（2025年 1頭、2024年 139頭）

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 果樹カメムシ類は夜温が高くなると活動が活発になるので、気温の推移と、予察灯やフェロモントラップでの誘殺数が増加する時期と量に留意し、果樹園への飛来状況の把握に努める。
- イ 発生時期や発生量は地域や園によって大きく異なるため、把握のための観察は一部の樹だけではなく、園全体の樹について行う。
- ウ 今後の発生状況については、病害虫防除所ホームページ (<https://www.pref.fukuoka.lg.jp/contents/fukuoka-bouzyosyo.html>) を参照する。

【茶】

1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 5月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや多かった（±～+）。

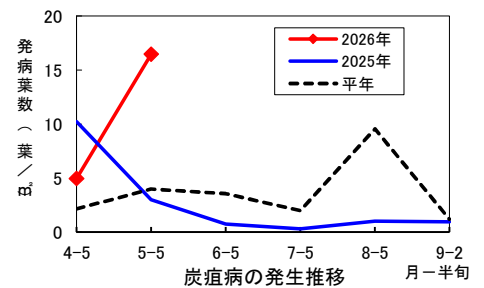
発病葉数 16.5葉/m²（平年 4.0葉/m²、前年 3.0葉/m²）

発病ほ場率 87.5%（平年 59.1%、前年 37.5%）

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～+）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 雨滴により孢子が飛散伝搬するため降雨が多い6～9月に発生が増加することから、防除は降雨前日までに実施する。



2 もち病

(1) 予報の内容

発生量：平年より少、前年並

(2) 予報の根拠

ア 5月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった（－）。

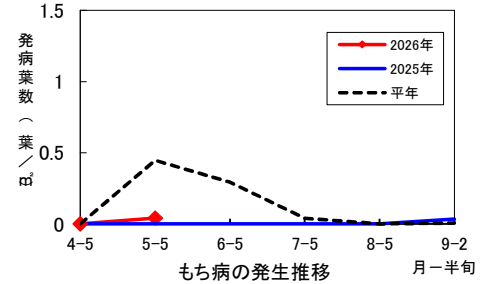
発病葉数 0.04 葉/㎡（平年 0.4 葉/㎡、前年 0 葉/㎡）

発病ほ場率 12.5%（平年 5.7%、前年 0%）

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～＋）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 6～7月に降雨が多く、多湿の場合に発病しやすい。摘採後の残葉での発生に注意し、萌芽期に他の病害虫との同時防除を行う。



3 カンザワハダニ

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年並

(2) 予報の根拠

ア 5月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった（－～±）。

50葉当たり虫数 1.8頭（平年 14.9頭、前年 0.8頭）

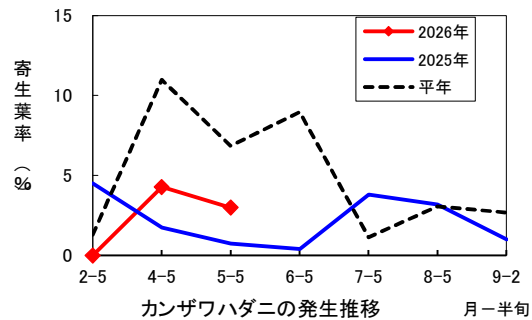
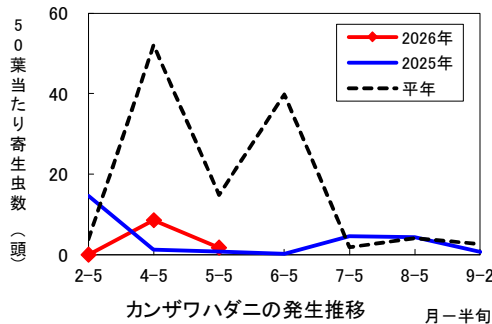
寄生葉率 3.0%（平年 6.9%、前年 0.8%）

発生ほ場率 62.5%（平年 51.8%、前年 12.5%）

イ 向こう1か月の気象予報では、やや少発生の条件となっている（－～±）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 発生状況をよく観察し、寄生葉率が2%以上の場合は、効果の高い薬剤を裾葉や葉裏に薬液が十分かかるよう丁寧に散布する。



4 チャノコカクモンハマキ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 5月5半旬調査の結果、ほ場での発生量は平年よりやや多かった（±～＋）。

巻葉数 0.21 葉/㎡（平年 0.07 葉/㎡、前年 0.08 葉/㎡）

発生ほ場率 25.0%（平年 15.5%、前年 25.0%）

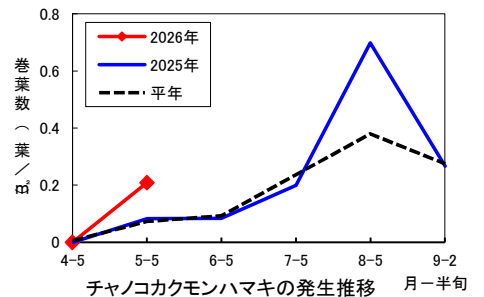
イ 八女市での4月1半旬～5月4半旬までのフェロモントラップによる誘殺数は、平年よりやや少なかった（－～±）。

※誘殺数は5 p 参照

ウ 向こう1か月の気象予報では、やや少発生の条件となっている（－～±）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 第1世代成虫の発蛾最盛期は、例年6月中～下旬頃である。ほ場での成虫の発生状況をよく観察し、成虫が最も多いときから7日後を目安に防除を行う。



イ 巻葉後は防除効果が劣るため、巻葉が確認されたら、直ちに防除を行う。

5 チャノキイロアザミウマ

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少なく、前年並

(2) 予報の根拠

ア 5月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった（-〜±）。

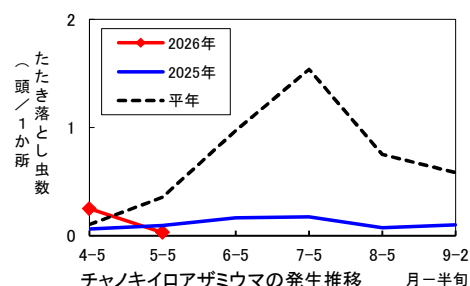
たたき落とし虫数 0.03頭（平年 0.36頭、前年 0.09頭）

発生ほ場率 12.5%（平年 34.8%、前年 25.0%）

イ 向こう1か月の気象予報では、やや少発生条件となっている（-〜±）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 発生量は5月中旬から増加し、6〜7月に最も多くなるので、B5判板上の10回たたき落とし法で、10頭以上見られる場合は防除を行う。



6 チャトゲコナジラミ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年より多

(2) 予報の根拠

ア 5月5半旬調査の結果、発生量は平年より多かった（+）。

寄生葉率 11.3%（平年 1.6%、前年 0%）

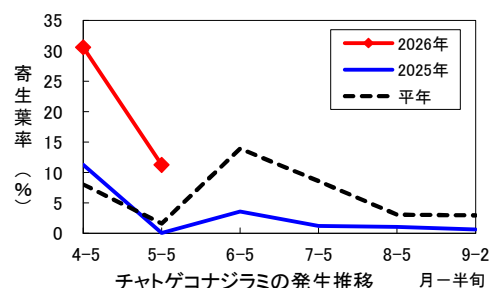
発生ほ場率 62.5%（平年 33.3%、前年 0%）

イ 向こう1か月の気象予報では、やや少発生条件となっている（-〜±）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 防除適期は若齢幼虫発生期で、第一世代幼虫の防除適期は、山間地では5月下旬〜6月上旬頃、平坦地では5月中〜下旬頃であるため、成虫の発生状況をよく観察し発生がほとんど見られなくなった頃から、他の病害虫との同時防除を徹底する。

イ 農薬の散布にあたっては、葉裏や裾葉に薬液が十分にかかるように丁寧に散布する。



7 チャノミドリヒメヨコバイ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年より多

(2) 予報の根拠

ア 5月5半旬調査の結果、発生量は平年より多かった（+）。

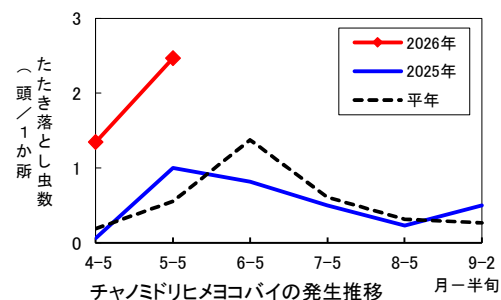
たたき落とし虫数 2.5頭（平年 0.6頭、前年 1.0頭）

発生ほ場率 87.5%（平年 53.3%、前年 87.5%）

イ 向こう1か月の気象予報では、やや少発生条件となっている（-〜±）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 二番茶期の発生状況に注意し、B5判板上への10回たたき落とし法で、4頭以上見られる場合は防除を行う。



農薬の安全・適正使用、飛散防止対策の徹底を！

福岡県では、農薬の安全かつ適正な使用及び保管管理、使用現場における周辺への配慮を周知徹底するとともに、農薬による事故防止を目的として、農薬適正使用の指導を関係機関、団体と一体となって取り組んでいます。使用者の安全はもちろん、周囲の人畜・隣接作物・河川等への配慮についてもご指導をお願いします。

1 農薬適正使用の徹底

○適用作物、使用量や濃度、使用時期、総使用回数などが記載されたラベルをよく確認し、使用基準を遵守する。

※農薬の種類によっては、登録の内容がメーカーによって異なるので、ラベルをよく確認する。

○有効期限切れの農薬は使用せずに、産業廃棄物として処分する。

2 飛散防止対策の徹底

○風の弱い時に散布する。

○風向、散布方向、散布時間、散布圧などに留意する。

○飛散しにくい農薬（剤型）や飛散が少ないドリフト低減ノズルを使用する。

○散布ほ場周辺の収穫前の作物には十分注意する。

○農薬散布の実施において、周囲の生産者、住民に周知を図る。

3 保護具の着用

○農薬の散布前に、ラベルの注意・警告マークをよく確認する。マスク、保護メガネ、ゴム手袋等を着用し、薬液を作成する。

4 農薬の散布後は、必ず散布器具を洗浄

○噴霧器、薬液タンク、ホースなどの散布器具を十分に洗浄し、残液はほ場外への流出や環境や後作に影響を与えないよう配慮して、ほ場内の農作物が植え付けされていない土壌にまく。

5 防除履歴の記帳

○農薬の散布が終わったら、作物名、ほ場の場所、使用年月日、薬剤名、使用濃度、使用量等を正確に記帳する。

6 空容器の処分

○空容器は、地域の農業用廃プラスチック適正処理推進協議会が実施する回収や、産業廃棄物処理業者に委託するなど、適切な処分を行う。また、野焼きは『廃棄物の処理及び清掃に関する法律（廃掃法）』で禁止されているので、絶対に行わない。